

Title	中国語を母語とする上級日本語学習者のスピーチレベルとシフトに関する研究
Author(s)	上仲, 淳
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/49214">https://hdl.handle.net/11094/49214</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	上 仲 淳 うえ なか じゅん
博士の専攻分野の名称	博士（言語文化学）
学位記番号	第 21508 号
学位授与年月日	平成 19 年 6 月 28 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	中国語を母語とする上級日本語学習者のスピーチレベルとシフトに関する研究
論文審査委員	(主査) 教授 三牧 陽子 (副査) 教授 沖田 知子 准教授 田畑 智司

#### 論文内容の要旨

我々は言語使用の際、対話相手や状況や場面に応じた言語行動を行っている。日本語を使用して話す場合、適切な「スピーチレベル（文末の「ですます」の使用・不使用と語彙の待遇度）」の選択とその切換えという問題は避けては通れない。日本語を母語としない日本語学習者にとって適切なスピーチレベルの使い分けは最も習得が難しいものの一つであると考えられている。本研究では、そのような日本語学習者に見られる中間言語的なスピーチレベル管理の様相に注目して分析と考察を行った。

本研究の目的は以下の三点である。まず一点目は、日本国内で 60%以上を占め最も人数が多いとされている中国語を母語とする日本語学習者のうち、ある大学に所属する留学生を調査対象者とし、彼らを取り巻く社会的ネットワークの中から日常生活で遭遇する日本語母語話者（以下 NS）との接触場面を抽出する。そしてそれらの接触場面においてスピーチレベルをどのように使いわけているかを調査し、スピーチレベルの選択基準とシフト管理における中間言語的な特徴を明らかにすることである。これは第 4 章と第 5 章の内容となる。次に二点目は、先行研究で留学生のスピーチレベル・シフトの要因としてこれまでに指摘されなかった事柄を、調査対象者のデータとフォローアップ・インタビューから見出すことである（第 5 章）。そして三点目は調査対象者に共通して見られたシフト管理のある特徴が、一定の期間を経た後にどのように変化したか縦断調査を行って明らかにすることである。これは第 6 章の内容となる。

本研究の意義は次の二点である。従来のスピーチレベルの研究は調査者によって作為的に組み合わせられた対話相手との実験室における談話データを扱ったものがほとんどで、調査対象者の私生活で日常的に行われている生の談話を扱ったものは極めて少ない。管見の限りでは石崎（2002）のみである。したがって本論のように調査対象者の社会的ネットワークを構成している実際の接触場面で行われた会話をデータとした研究が必要である。もう一点は、将来的な一般化に向けて示唆を与えるケーススタディとしての役割である。本論で明らかになった結果を、今後検証を重ねることによって日本語教育に応用していきたいと考えている。

次に本研究の調査の概要を述べる。まず調査対象者は、スピーチレベルと敬語の部分的コントロールが可能であるとされる上級レベルの、中国語を母語とする日本語学習者 3 名（C1、C2、C3）とした。関西の某大学（以下 A 大学）に在籍し、年齢は 20 代後半から 30 代前半で、いずれも 3 年から 3 年半の日本語学習歴を持つ。A 大学の留学生が男

性よりも女性のほうがかなり多かったことから女性を調査対象者とし、ジェンダーを統一することによってスピーチレベル管理の特徴を比較しやすくした。各人の社会的ネットワークの中から会話を録音する相手を相談して決め、自然な会話を録音してくれるように調査対象者に依頼して IC レコーダを貸し出した。対話相手となる NS には可能な限り筆者が事前に協力の依頼をして了承のもとに会話を録音した。もしくは会話採集依頼の書類を調査対象者に持たせて録音前あるいは録音後に了解を取った。録音中は IC レコーダを見える場所に配置して録音した。ポケットに入れておいた場合は録音後に NS にその旨伝えた。そして約 1 週間後にレコーダを回収して会話を書き起こし、2 週間以内にフォローアップ・インタビューを行った。

スピーチレベルは文末のスピーチレベルと語のスピーチレベルに大きく分けられるが、本研究では、特に文末のスピーチレベルに注目し、丁寧体（「です/ます体」の使用、+）と普通体（「です/ます体」の不使用、0）の 2 分類とした。付随的に、語のスピーチレベルについても、「狭義の敬語（尊敬語や謙譲語）、+」あるいは「軽卑語、-」があった場合、言及した。また本稿では方言形もスピーチレベルに含めて考察した。以下調査結果を述べる。

第 4 章では調査対象者のスピーチレベルの選択について分析と考察を行った。その結果、調査対象者のスピーチレベルの選択基準として、「丁寧体使用の基準」と「普通体使用の基準」があり、それぞれ 3 つのサブカテゴリー（「対話相手に関する基準」、「状況に関する基準」、相手の言葉に合わせるという「アコモデーションの調整」）に下位分類して整理した。各々のカテゴリーには NS と共通の要素だけでなく調査対象者に特有の要素も含まれ、例えば丁寧体使用の基準として、C3 が自分の言葉遣いに対して厳しい相手に丁寧体を使用するというような独自の基準も見られた。丁寧体と普通体の選択基準にコンフリクトが生じた場合は、いずれかに優先順位を置く必要があるが、各調査対象者によって個人差が認められた。例えば、C1 が社会的上下や役割関係よりも心的距離を優先したのに対して、C2 は社会的上下や役割関係を優先した。スピーチレベルの選択基準には他に「コミュニケーションの達成に関わるストラテジー」というカテゴリーも存在した。それについては、「普通体のほうが短くて分かりやすく便利なのでなるべく普通体を使用する」など待遇面よりも機能面を重視したり（C1）、対話相手や話題の人物（第三者）に対する狭義の敬語（尊敬語・謙譲語）の使用をなるべく避ける（C1、C3）などの特徴が見出された。また、調査対象者がフォローアップ・インタビューで述べた内容と実際の談話に現れたデータが時折食い違っていることから、「無意識的な言語使用」がしばしば行なわれていることが確認された（C1、C2、C3）。方言の使用に関しては個人差が大きく、標準語と方言または若者言葉の区別が曖昧で誤解も生じていた（C1、C2、C3）。C1 は最も方言使用が多く、C1 独自にユニット形成した中間言語的な方言形式も見られた。社会的ネットワークに関しては、アルバイト・ドメインの影響が非常に大きかった。母語文化の影響は比較的小さく、自ら習得した待遇規範意識と社会的ネットワークから受ける影響から気づきや経験を通してスピーチレベルの学びが実現されていることが明らかになった。

第 5 章では、調査対象者のシフト管理について考察した。スピーチレベルの一時的なシフトに関わっていると考えられる発話の種類および機能についてまとめた。「対人機能」と「談話標識機能」を有する「NS にも調査対象者にも見られるもの」以外に、従来の先行研究では明示的に指摘されてこなかった NS には見られないであろうと考えられる調査対象者に特徴的なシフト管理を中心に考察を行った。まず、全体的な傾向として、スピーチレベル管理に終始注意を払い続けることができないためスピーチレベルにゆれを生じ、予期せぬシフトが生じていた（C1、C2、C3）。このような全体的な傾向を踏まえた上で、微視的には以下の 6 項目を指摘した。①「です/ます」を含む、あるいは含まない会話の決まり文句が存在する（C2、C3）、②「のだ」に「です」が後接しやすく「んです」となる（C1、C2、C3）。③関西では聞きなれない「だ」を回避し「です」でしばしば置き換える（C1、C2、C3）。④語のスピーチレベル（+）に文末のスピーチレベルの（+）が共起しやす（C2）。⑤疑問文マーカーとして「ですか/ますか」が使用される（C2、C3）。⑥その他日本語能力の不足が原因で、適語探索を行ったり（C2）、引用表現を上手く構文化できないためシフトに影響を与えること（C1、C2、C3）、また、第三者である話題の人物に対する狭義の敬語の不使用（C1、C3）や、社会的ネットワークの影響からジェンダーに相応しくない軽卑語の使用（C1）が見られることを指摘した。また、対話相手との心的距離の短縮が期待できる「心情の直接表出」の発話であっても、聞き手目当てとなるような場合には普通体へのダウンシフトが不適切になることを述べた（C1）。

第 6 章では、調査対象者に共通して見られた中間言語的な特徴、すなわち気の置けない仲の良い人物を対話相手とした際でも普通体を基調とした談話にしばしば意図的ではないアップシフトが現れる特徴について、限られたデータ

ではあるが、第一回目の調査から一定の期間をおいたのちできるだけ同じ条件の下で縦断的調査を行った。その結果、C1 は注意度が持続しないために起こる無意識的なアップシフトが前回と同様数分毎に1回程度生起していることがわかった。C2 は「のだ」の形式に「です」が後接しやすいく傾向を除き、前回見られた問題点が概ね改善されていた。それに対して、C3 は第一回目の調査の結果と著しい共通点が多数見出され、多くの不必要なアップシフトの要因が改善されないまま残っていた。このようなことから社会言語学的な能力のひとつであるスピーチレベル管理能力は、C1 においてはほぼ横ばいで、C2 においては向上が見られ、C3 においては前回の問題点がそのまま改善されず残っており、化石化 (fossilization) がすすんでいることが明らかになった。第一回目の調査以降の社会的ネットワークの変化に鑑みて、各人の環境の変化が言語習得にも影響を及ぼした可能性を指摘した。

以上、日本語学習者の社会的ネットワークに根ざした研究として本研究を位置づけ、調査対象者の実際の接触場面において見られたスピーチレベル管理について論じた。話し言葉における丁寧体と普通体の適切な使い分けの指導が教室で行われるのはまれである。スピーチレベルの使い分けの技能は学習者にとって非常に習得が難しいにもかかわらず日本語教育において見落とされがちな分野となっている。留学生の数が年々増加し、日本国内のあらゆる場所へと彼らの行動範囲が広がっている昨今、日本人とのよりよい人間関係構築のために適切なスピーチレベル管理の習得は避けては通れない。日本語の第二言語話者によるスピーチレベル管理の実態解明と、より効果的でシステマティックな指導法の開発、および日本人との相互理解のために、本研究のような実証的なケーススタディの積み重ねが必要であると考えられる。

#### 論文審査の結果の要旨

本研究は、上級レベルの日本語学習者によるスピーチレベル管理の実態解明を目的とし、中間言語的なスピーチレベル管理の様相に注目して分析と考察を行なったものである。対話相手や状況に応じた適切なスピーチレベル (文末の「です/ます」の使用・不使用と語彙の待遇度) の選択やシフトに関する管理は、最も習得が難しいものの一つに挙げられること、また、上級になるほどスピーチレベルの不適切な使用がよりよい人間関係構築にとってリスクになりやすいことから、本研究は、より効果的でシステマティックな指導法開発の基礎研究として価値が認められる。

本研究の調査対象者は、最も日本語学習者数が多い中国語を母語とする留学生3名である。最大のオリジナリティは、従来の実験的に収集したデータではなく、アルバイトドメイン、大学ドメイン (対教員、対友人)、社交ドメインなどの社会的ネットワークをもとに、実際の接触場面における多様な生の談話を収集、分析した点にある。

その結果、複数のドメインにおける人間関係に応じたスピーチレベルの使い分けはおおむねできてはいるものの、一方で独自に形成された中間言語的なスピーチレベル管理の特徴があることを見出すことに成功し、詳細に示した。その特徴として挙げられたのは、待遇面よりも機能面の重視、狭義の敬語の使用の回避、独自にユニット形成した中間言語的な方言形式の使用などである。これらの特徴形成に関する考察では、母語文化の影響よりも長時間接触するアルバイトドメインの影響が非常に大きいこと、および、自ら習得した待遇規範意識と社会的ネットワークから受ける影響から気づきや経験を通してスピーチレベルの学びが実現されていることなどを指摘した。次に、調査対象者に特徴的なスピーチレベル・シフトとして、丁寧体あるいは普通体の文末と特定の表現が固定的に使用されることによるシフトなど、従来指摘されていない特徴を明らかにした。親密な友人との普通体基調の談話にしばしば意図的ではないアップシフトが現れる現象を示すことによって、上級話者であってもスピーチレベル管理に終始注意を払い続けることの困難さを実証的に指摘した。さらに、これらの調査対象者に共通して見られたシフト管理の特徴に関して縦断調査も実施し、各人の環境の変化の差が言語習得に影響を及ぼした可能性を指摘した点も評価できる。

以上のように、本論文は、日本在住の上級日本語学習者を対象とし、従来にない方法によってスピーチレベル管理の中間言語的な特徴を分析した結果、多くの新規の知見をもたらし、日本語のスピーチレベル教育に貢献をなすと考えられる。よって、博士 (言語文化学) の学位論文として十分価値あるものと認められる。